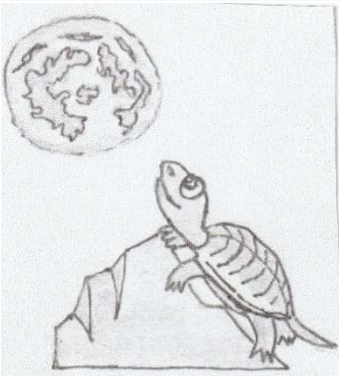
第１６９号

芥川だより

発行日＊２０２１年２月１日　e-mail: ab_879686240@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http:// akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集　　川口　伸
印刷・発行 下村嘉明
〒661-0951
尼崎市田能5-3-10-601
☎090-8796－8624

＊＊＊＊＊＊＊＊ 一部２００円です ＊＊＊＊＊＊＊＊



口が裂けても言えない！

「私の立場では『今年難しい』とは口が裂けても言えない」と森会長が講演会で言った。誰しも、この言葉からオリンピック開催は難しいと勘ぐるだろう。膨大な経費を使った今、出来ませんと簡単には言えない。３月の聖火リレーが始まる直前のぎりぎりの時期になってから「開催は難しい」という魂胆だろう。

昨年、コロナが流行りだし延期をしたのだが、流行の拡大が収まらず普通なら今年の開催も出来ないと早く言えばいいのに、それが出来ない大きな理由は金だ。商業主義が強くなってしまった結果の哀れな結末になる。すべてをコロナの結果だと言い張り誰も責任を取らない。万事丸く収まる、税金の無駄使いの極みだ。

オリンピックなら開催されずとも、我々の生き死には直接関係しないが、地球温暖化は時限爆弾のように刻々と確実に迫ってきている。二酸化炭素による地球温暖化で海面温度が上がり異常気象が頻発し大型台風や森林火災が猛威を振るっている。各地の氷河が非常に速い速度で溶け出している。このまま行くと近い将来海面が上昇し水没する地域が増え被災者難民で世界的な混乱と人類破滅が始まると忠告する科学者が多い。

では、どうしたら生き延びられるのか。二酸化炭素の排出を減らすことである。しかし、今世界は資本主義社会である。あくなき利潤追求をする為に経済成長は欠かせないシステムで、世界の隅々まではびこっている。資本主義の本質から考えて一時的には抑制できても、経済成長を止めることは出来ない。資本主義と心中するか、別の社会システムを考えるか分岐点にある。成長なき社会システムを考え世界的に公平で平和な生活様式を探し、二酸化炭素排出量を増やさない合意が得られても、日本での生活水準は明治・大正時代ぐらいの質素な生活を覚悟しなければいけないと想像する。それでも死に絶えるよりはるかに幸せだ。まだ、成長しながらの排出削減を唱える世論が主流だが資本主義の本質を理解していない無責任な論調だと思う。それとも、人類を破滅に導く資本主義の弊害を口が裂けても言えない事情があるのだろうか。我々は、個々で生き延びる対策を考え実行するしかない。

死をめぐるあれやこれ　（７５）

石川　吾郎

二度目の特別定額給付金の一律支給を！

新型コロナ特措法が国会を通過して施行される。感染して入院を拒んだ者に罰則を科す内容という。だが待てよ。新型コロナに感染をして入院やホテル滞在隔離などを希望しても、自宅療養（これは正確でない。ほとんど自宅放置）せざるを得ない人がどれほど多くいるだろう。一年前感染が広がっていた中国の春節に中国人観光客を大量に招き入れ、この一年間医療体制の拡充や対策、経済的な支援を怠ってきた政府の責任はどうなのだ。これが追及されない不条理は許されない。◆雀の涙の補助金と中途半端な自粛要請でダラダラといつまでも新型コロナを収束できない現状は政府の不作為と、感染を広めるゴーツー政策などによる**人災**といえる。マスクも不要な生活ができるニュージーランドの例を見ればこれは明か。我々は今、自分が感染しないように極力自衛をすることが第一。ただそのため、生活を維持するための補助金が必要だ。◆我々にできるのは、十月までには行われる次の総選挙で、必ずこの無能で腐敗した自公政権にＮＯを突きつけること。しかしそれまで待つわけにはいかない。◆今、ネットの請願キャンペーンサイトで「二度目の特別定額給付金の一律支給を求めます」という署名運動が行われており、これに賛同・署名をして広めてはどう

だろう。この請願サイトは大勢の人の力を集める力を持っている。すでに八万人ほどの賛同が集まっている。これに署名して二度目の特別定額給付金を実現しようではないか。ネット検索で「チェンジオルグ」のページ。そこで「二度目の特別定額給付金」で検索すると、このページに行ける。

芥川だより一六九号　目次

		ページ
巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム75	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳83	坂本一光	2
哲学爺いの時事放談33	祖蔵哲	3
大峰奥駆道39	下村嘉明	5
大人の今昔物語76	石川吾郎	6
新型コロナウイルス愚考（10）	明石幸次郎	7
オクラの山たより53	因了生	8
隠された歴史28	満田正賢	12
道をゆく22	成瀬和之	15
マルクスから学ぶ（1）	成瀬和之	16
俳句	土田裕 影山武司	17
編集後記	ＳＫ生	17
ふみの道草32	山椒魚	18

素老人☆よもだ帳（８３）

坂本　一光

◆三億キロはるか彼方のリュウグウへ旅する技は戦に使える

菅首相が日本学術会議会員の任命に当たって、推薦された会員候補者一〇五名中の六名の任命を拒否してから四月が過ぎる。リュウグウに旅立った「はやぶさ」から「はやぶさ2」の快挙に国民が胸を躍らせているとき、そういう無邪気さの傍には、この技は戦に、いやいや我が国の安全保障に使えると虎視眈々、ほくそ笑んでいる目があることを忘れてはならない。

さて政府と政権党である自民党は、任命拒否問題に至るはるか前から学術会議の変質を画策していた。一九八三年には、登録された全国の科学者が選挙によって学術会議の会員を選出する制度を廃止した。次いで、二〇〇五年、選挙制度の廃止後行われてきた学会による会員推薦制度も廃止し、学術会議が会員候補者を推薦する現在の制度に変更した。政府は会員の選出方法に一貫して口を出し、学術会議の政府からの独立性をなきものにしようとしてきた。おそらくそういう選出方法の変更で政府に批判的な学者が会員から排除されると考えたのかもしれない。

それはなぜか。国立国会図書館法の前文には、国立国会図書館は「真理が我らを自由にするという確信に立って、憲法の誓約する日本の民主化と世界平和に寄与することを使命として、ここに設立される」とあり、国会図書館には「真理がわれらを自由にする」という言葉を刻んだ碑がある。この言葉は、新約聖書・ヨハネによる福音書中にある「真理はあなたたちを自由にする」に由来すると言われている。政府は要するに、真理などに従いそれを盾にとって時の政権と国家を批判する学術会議及び会員の言動が目障りであり、許せないのである。それはまたなぜか。

その訳は、日本学術会議の前身である「学術研究会議」が「大東亜戦争」に総動員されていった歴史を見れば明らかになる。一九四三（昭和十八）年八月二十日の閣議決定「科学研究の緊急整備方策要領」は、学術を国家による戦争の僕として動員する宣言であった。

『大学、その他の科学研究機関における研究力を、急ぎ最高度に集中発揮せしめ、その飛躍的向上を図り、戦力のすみやかなる増強を計るため、これが体制整備の必要あり。

よってこれら研究機関における科学研究は、大東亜戦争の遂行を唯一絶対の目標として、強力にこれを推進するとともに、学術研究会議を強化活用して学理研究力を最高度に集中発揮せしめ、なかんずく直接戦力の増強に資する研究に関しては、関係方面との緊密なる協力体制をとり、また直接戦力増強と密接不可分なる基礎的研究に関しては、各種研究機関独自の性格および機能を最高度に発揮せしむべく、これがためには、その関係研究機関および研究者を計画的に動員するものとす。

また、大学その他科学研究機関の内容および組織については、前記の計画を完全に遂行しうる様、これが重点的整備拡充を図るとともに、科学研究要員の確保ならびに、必要資材および研究費の充実確保を図るものとす。以上の目途に基き左の措置を講ず。

一　学術研究会議の機構を整備強化するとともに、これに科学研究動員に関する特別委員会を設置し、また大学その他重要研究機関には、それぞれこれと連絡ある委員会を設置せしめ、文部省においては両者を活用して学理研究力の集中発揮にあたり、かつ科学の飛躍的向上に必要なる行政的措置を行うこと。

二　科学研究要員の充実を図るとともに、大学および専門学校の卒業生にして緊要なる研究に従事すべき者を優先的に配当し、また研究要員の急速なる増加養成を図り、専心研究に従事せしむるため研究要員の待遇につき、所要の改善を考慮すること。

三　科学研究用資材については、所要の数量を優先確保するとともに、これが重点的配分を行うなど必要なる措置をこうずること。（二〇二一年一月二十五日「しんぶん赤旗」）』

これ以降、学術研究会議の会員は、それまで学術研究会議の推薦に基づき内閣が

任命する方法から、推薦なしの内閣任命制度に変更となり、会長副会長も会員による互選から内閣による任命制に変更された。今回の日本学術会議会員の任命拒否問題は、戦前の学術研究会議の戦争動員への道を、日本学術会議に歩ませようとする布石に見える。

折しも、この間、政府は憲法に違反する戦争法・秘密保護法・テロ対策防止法などを強行成立させた後、そもそも学術研究はデュアルユースであって研究に軍事用も民生用も区別はないとの美名のもと防衛省の軍事研究に百億円以上の税金を投入、日本の学術を再び戦争に動員しようと躍起になっていた。そういう政府の動きに日本学術会議会員の多くは批判的であり、また日本学術会議自体も戦後再出発の原点に立ち返り軍事研究に再び加担しない立場を明らかにしていた。アベ政治もスガ政治も、彼らが進む道を掃き清めたかったと見える。自ら進む道にはどんな「異物」の存在も、たとえ石ころの一つであっても認めぬとの宣言をしたのだ。税金から数百億、数千億円の武器爆買いや米軍への思いやり予算を惜しまない国が、日本学術会議には年間十億円の税金が投入されていると言って法に違反する介入をする。この尋常と思えない政治感覚は、昨年来のコロナ禍に対する悲しいほどの無責任な無策政治にも露呈している。辺野古の海に捨てる金も然り。日本の政治は金輪際に転がり落ちてしまったようで、泣くに泣けない。

山笑う国が笑えぬ国となり
（かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人）

哲学爺いの時事放談（３３）

祖蔵　哲

陰謀論の哲学

去年の発生1月以降、ずっと新型コロナの状況変化を追跡しているが、前月の予想どおりこのコロナはインフルエンザ・パンデミック歴代2位の１９５７年アジア風邪死者２００万人を1月１６日に超えた。規模では一桁大きな歴代一位のスペイン風邪を別格として史上第二という不名誉な記録を達成したのである。日本でもアジア風邪は5、７００人の死亡者が出たと記録されているが、この数も一月末に超えた。政府は去年7月から始めた経済優先の「GOTOキャンペーン」を一時停止し、1月１３日に2度目の緊急事態宣言を1か月期限として出した。しかし、この2月になってもこのキャンペーンで増加した感染拡大は止まらず、2日になって緊急事態延長を決定した。世界全体の新型コロナウイルス感染者数も2月以降すでに1億5千万人を超す勢いとなっている。最大の感染国は米国で世界全体の25％が集中している。

その米国で歴史的な大事件が発生した。所は首都ワシントンである。連邦議会は1月6日、昨年の大統領選の州ごとの選挙人団の投票の結果を認定するため上下両院合同会議を開会しバイデン次期大統領の勝利を最終認定する予定だった。ところが「選挙は盗まれた」という根拠のない主張をしていた現職のドナルド・トランプ大統領の支持者たちは、ホワイトハウス近くの広場にてトランプ出席のもと「Save America」という集会を開いた。その集会でトランプ大統領は演説を開始。「選挙の勝利は極左の民主党の連中によって盗まれ、さらにフェイクニュースのメディアによっても盗まれた」と述べ、「この後、議事堂へ歩いて向かおう。俺もいっしょに行く」と支持者を鼓舞した。抗議集会に参加していた数千人のトランプ支持者が連邦議会へ向けて行進を開始、デモは暴徒化し連邦議会の審議が始まった直後、議事堂に大挙して押し寄せ、「トランプを支持する」などと唱えながら議事堂内に侵入し米民主主義のシンボルを荒らしたり、破壊したり傍若無人の行動をとった。侵入者の多くは極右団体であったが、中でも目立ったのがバッファローの帽子をかぶった陰謀論Ｑアノンの熱烈な信奉者であった。

米国には民主党の大物政治家や共産主義者がひそかに運営する秘密結社の「ディープステート（影の政府）」があり、人身売買や悪魔崇拝が行われているという「陰謀」を主張しているのがＱアノンである。彼らにとってトランプは米国を救うために神が遣わした救世主で、官僚や民主党員、ユダヤ人、国際金融資本などによる陰謀から一般庶民を守ろうとする「リーダー」であるという。荒唐無稽な内容だが、全米で数百万人といわれるその影響力は無視できない。この団体は最初単なるカルト集団であったが、次第にＳＮＳなどを通じて拡散され、そしてトランプの主張と近い「反知性主義」「反自由主義」「反グローバリズム」など既存の価値の全否定から、その原因としての「陰謀論」を作り上げた。彼らはユダヤ人が操っているというマスコミは信じない反既存メディア、反中国という姿勢でもトランプと共通する。反グローバリズムで自国中心主義に帰り、自国に活路を見出したいのだが、そこには有色人種や不法移民などそして裕福層などの既得権益層がいる。中心を現在は貧しいがかつては良き時代の白人層に限ること、これは絶対に努力しても獲得できる特質ではないのであるが、これを中心に取り戻そうとしている。

本来「陰謀論」は常に弱者の論理として働いてきたのであるが、現職の大統領と結びつくことによって「強者の論理」になる可能性が出ていた。歴史上、陰謀論を支配の論理としたのはヒトラーのナ

チス第三帝国が最も有名である。

（1）陰謀論とは

陰謀論とは、ある出来事や状況に対する説明のことであり、すでに広く知られ理解された説明があるにもかかわらず、邪悪で強力な集団や人物による陰謀や謀略が関与しているとするものである。そんな前近代的な魔女伝説のような中世世界的な言説が現代のような「科学時代」に連綿として続くのはなぜだろうか。

一般的に、陰謀論は科学的否定＝「反証」に抵抗し、反復や循環論法によって強化される。その陰謀論と相反する証拠があったり、陰謀論の証拠となるものがなかったりしても、どちらもそれが「完全秘密」による真実の証拠として再解釈されるため、陰謀論は証明されたり反証されたりするものではなく、信仰する事柄になる。むしろ証拠が発見できないからこそ「陰謀」なのであり、それが反復されることによりその確信は強化されるのである。「神は見えないからこそ真実」なのである。ただ特殊な人にはそれが「見える」という。確かに現代は科学時代で昔からの迷信や不合理な事柄は解明され合理的説明がなされている。しかし、すべてがこのように説明されるかというとまだ解明できていないところの方がむしろ多い。世界は解明されることによってかえって解明されていないことが明らかにされるからである。

（2）陰謀論の世界観「二元論」

陰謀論の世界観の特徴は「善悪二元論」である。想定されている首謀者は、単に自分だけが良ければという利己的な意図や異なる価値観を持つ人々ではない。むしろ、陰謀論では、善と悪が戦っている白黒の世界が想定されている。キリスト教的に言えば悪魔との闘いである。世界の苦しみの原因はすべてこの悪が原因とされ、その首謀者、集団の悪の意図が原因とされる。そして陰謀論の対象となるのは支配層や社会的エリートである。かれらは現実の政治や経済を支配しているため、その恩恵を受けていない階層はこれをターゲットにする。そしてその支配を悪として区分し、自らの主張を正義の正当性として根拠づけるのである。

この「二元論」は西洋近代の思考原理でもある。中世スコラ哲学の神学的世界観を否定して近代的合理思考を発見したデカルトは「われ思う故にわれあり」という原理を「方法的懐疑」から導いた。これは「自分自身を疑えば疑うほど、その疑っている自分の存在の確実度が上がる」という「思考する客観的な私」と「思考される主観的な私」の二元論的分離である。ここにおいては「疑う」ということ自体が自分自身の存在の確実を保証するという構造になっている。これは「疑わしいこと」が自分自身の自己同一性を確証しているということにもつながる。二元論は不確定状態を排除する思考である。

（3）陰謀論の種類

陰謀論は大きく分けて二つのタイプがある。何らかの陰謀を原因として引き起された結果が「客観的事実」としてはっきりいる「個別的な陰謀論」と影にかくれている出来事の「体系的な陰謀論」である。前者は「同時多発テロ」での「ビンラディン陰謀説」や今回のコロナ「中国生物兵器説」などであり、後者は歴史的な背景をもつものでユダヤ人やフリーメイソン、共産主義、またはカトリック教会が行っていると疑われている工作やキリスト教分派に焦点を当てた陰謀論で一般的なシナリオである。Qアノンは今のところ「盗まれた選挙」といった個別的事象を対象にした陰謀論であるが、やがては体系的な陰謀論になる可能性もある。そうなれば米国以外にも拡散するだろうし、また他の陰謀論との結びつきも出てくる。現に日本でもこのQアノンは信奉者を増やしつつあるようだ。

（4）陰謀論の論法

陰謀論はすべてが不合理な説ではない。それはある意味、論理的でもある。ただしそれは「詭弁」という論理である。詭弁とは、古代ギリシャにおいてソフィストが用いた論術として知られている。それを論破するためにアリストテレスは「詭弁論駁論」を書いている。

詭弁の方法は多数多様にある。その中で「陰謀論」がよく用いるのが「未知論証」である。これは「無知に訴える論証」である。例えると、Aさんに対して「B氏は地底人がいないと断言している。しかし、そんな証拠はないので地底人はいることになる」という論法である。これはAさんの「未知」に対する「無知と思われたくない：弱み」を利用して自分の意図する説を信じ込ませる方法である。その他、陰謀論の論法は、見えない「謀者」を「原因」と決めつけたいため、「原因―結果」の因果論を巧みに利用する。つまり、原因は複数考えられるのに、それを一つの『謀略』だと特定することや、「結果」には良いことも悪いことも伴うのに「悪い」結果だけを取り上げてそれを一つの原因に結び付ける等である。さらに陰謀論は「結果」すら捏造する。今回のトランプの「選挙は盗まれた」陰謀論では、ある道に投票用紙束が路上に捨てられている写真がネットにアップされて拡散していた。しかしそれは別の写真で今回の選挙とは関係のない写真であった。しかし、その捏造された「事実」は拡散されるにしたがって「真実」となっていくのである。

（5）事実と真実：ポスト・トゥルース

『「事実」は一つだが、「真実」はたく

さんある』～「事実」と『真実』の違いはなにか。例えば、「周知の事実」という言葉があるが、『周知の真実』という言葉は聞いたことがない。「事実無根」はよく聞きくが、『真実無根』とは言わない。また反対に、『真実味がある』とは聞くが、「事実味がある」とは聞いたことがない。『真実を告白』とはよく聞くが、「事実を告白」とは聞き慣れない。「事実」と『真実』、似た意味合いなのだが、その意味は異なる。「事実」は、実際に起こった事柄を指し、『真実』にはその事柄に対する人の解釈が入っている。「事実」が客観的であるのに対して、『真実』は主観的なのだ。そう考えると『真実』は、「事実」に関わった人の数だけ存在していると言える。「事実」なのか、『真実』なのかを見極め、「事実」を「事実」のまま受け取るのは非常に難しい話である。なぜならば、それが「事実」であっても、人から伝え聞いた瞬間に主観がはいるし、聞き手も人なのでどうしても主観が入いる。そういう意味では、「事実」と『真実』の見極めには訓練が必要なのである。この訓練を読み書き能力に例えて「リテラシー」というとは以前の号でも話した。私たちは「事実」を知る、認識するときには「バイアス」がすでにかかっている。この偏見を正しく知ることが「事実」を「真実」に近づけることでもある。ともあれ、陰謀論における「結果」説明の「事実」、無論それが「捏造」であることは論外であるが、それが単なる他者の「意見」すなわち「一つの真実」であることが多い。

さて、今回は久しぶり新型コロナ時事関連テーマから一時離れて「陰謀論」をテーマに哲学をしてきた。しかし、やはり底辺には共通するものがある。それは「不安」である。繰り返し述べてきているように「近代化のジレンマ」すなわち「理性が支配する世界：科学的世界」と「感性が支配する世界：経済世界」との対立である。そしてその対立構造が「環境破壊」と自らの「生命危機」を生み出した。これが現代の「不安の構造」である。しかし、陰謀論はこの構造を「善悪」という社会的倫理でなく主観的価値に還元してしまう。かれらの倫理観は狭い集団での閉鎖的倫理である。しかし、それでもなお「陰謀論」は消えてはまた蘇り、これを繰り返しているのか。人間にある「不合理」「不条理」の感情は根源的なものであろうか。

大峯奥駈道（３９）

下村　嘉明

例年のように今年も正月2日に愛宕山神社に参拝する為に登った。コロナ禍であるので感染予防をしてJR保津峡駅から尾根筋を友人らとゆっくり登る、中腹より雪がありアイゼンを付け参道に出ると道は一面の雪であった。新雪が踏み固められアイゼンが心地よく夏場よりも歩きやすい。やっぱり、冬山はいいなあ！と思いながら登った。

神社も感染対策で例年とは少し違ったが、お神酒は社務所前に置かれていて3杯も頂いた。例年は素焼きの杯が置かれているのだが、今年は小さなプラスチックに変っていて少し断念な気持ちがした。その為か酒の味も違って感じられた。樽酒の神聖かと疑ったが、有難いお神酒なのだから有難く頂戴した。例年に比べ参拝者は少なかったが快晴無風のドスカ天の天気に恵まれ楽しい愛宕山であった。

4日は六甲山へ朝早くから登った。いつもの宝塚駅から六甲山最高峰を往復した。思ったよりも雪が少なく期待外れであったが、途中道が凍っている箇所があり時間がかかった。最高峰で記念写真を撮り山頂直下の一軒茶屋に寄ったが客が少なく経営が大変だろうと同情心でビール・きつねうどん・カツカレー・カツ丼と立て続けに注文して食べ尽くした。山小屋の経営は大変だ。

茶屋の反対側に道路をはさんで大きな建物が出来ていたので見に行くと、すごくきれいなトイレであった。暖房もあるし幾つものおしゃれなベンチもある。昔からあった古いトイレはきれいに撤去されレストランかと見間違うような大きなおしゃれなトイレである。六甲山の新名所になるように作り替えたのに違いない。六甲山全山歩いてもこんなきれいなトイレはない。

この日も天気が良くて気分が最高であった。やはり昼に食べ過ぎた為か下りは速く歩けなかったが、すれ違う人もほとんどなく静かな山の正月を満喫できた。おかげで体調も良く元気に山歩きが出来ることに感謝している。

渡辺　和子さんの『置かれた場所で咲きなさい』のように自分の今ある環境の中で楽しく生きることが大事だと思う。確かにもっと恵まれた環境にいる友人らの話を聞くと自分もついつい他人と比較してしまうが、他人と比較しても何も良いことはない。私は私と、開き直って人の事はあまり気にせず唯我独尊の心境で山に遊び心身をリフレッシュし続けたい。心が山を登る快感を味わい尽くしたい。

大人の今昔物語（７６）

石川　吾郎

伊吹山の三修禅師、天狗の迎えを受けた話（巻第二十　第十二）

今は昔、美濃の国に伊吹山という山があった。その山で長年修行を積む聖人がいた。この人、実は何も悟りはなく、教文を学ぶこともしていなかった。ただ阿弥陀の念仏を唱えることの外は何も知らなかった。その名を三修禅師といった。外に何も考えずひたすら念仏を唱えて、長年が過ぎていった。

そうこうする間に、ある時御仏の前で夜更けまで念仏を唱えていると、空から声が聞こえてきた。その声が言うよう「汝は篤く私に帰依しておる。念仏の功徳が数多く積もってきている。ゆえに明日の未（ひつじ）の刻（昼過ぎの時刻）に、私が汝を迎えにくることにした。ゆめゆめ念仏を怠ることなかれ」と。聖人はこれを聞いてからというもの、ますます倦むことなく、一心不乱に念仏を唱え続けた。

翌日なると、聖人は沐浴し身を清め、香を焚き散華をして、弟子たちにこの旨を告げて、もろともに西に向かって念仏を唱えていた。そうしていると、ひつじの刻をやや過ぎたころに、西の山の峰の松の木の間が、だんだん光り輝くように見える。聖人はこれを見て、いっそう力を込めて念仏を唱え、合掌をして凝視すると、仏の緑の髪が徐々に現れて、金色の光を放っている。髪の生え際は金色を磨いたよう。眉間は秋の月が空に輝くようで、白毫（びゃくごう）からは白い光を放っておられる。二つの眉は三日月のようだ。二つの青い蓮華のような目は切れ長で、徐々に月が登ってくるような風情。また御仏に従うさまざまな菩薩たちは、妙なる楽を奏で、その有さまは尊いこと限りない。また空から色とりどりの花が雨のように降ってくる。御仏の眉間の白毫からの光がこの聖人の顔をお照らしになる。聖人はただただ礼拝をして数珠の緒も切れるばかり。

そうする間、紫の雲が厚くたなびいて聖人の庵の上におおいかぶさる。このとき観音が紫金の台を捧げて聖人の前に近寄りたまう。聖人はそれに這い寄ってその蓮華に乗った。御仏は聖人を迎えて、はるかに西方に向かって去りたまう。弟子たちはこれを見て、念仏を唱え、尊がること限りない。

その後、弟子たちはこの日の夕べから、聖人の庵で念仏を唱え続け、聖人の菩提を弔った。その後七八日経過し、この僧房の下級僧たちが、沐浴のための薪集めに奥の山に入ると、谷間に差し出た大きな杉の木があった。その杉の梢から大声で叫ぶものがいる。

よく見ると、法師が裸にされて梢に縛り付けられている。これを見てさっそく一人の僧がその木に登り見ると、極楽に迎え入れられたはずの、自分の師である聖人が、ツタで縛り付けられているのだった。これを見た僧「聖人さま、このありさまはどうなされました」と、泣く泣く近寄って聖人を助け出すと、聖人「御仏が今すぐにもお迎えにおいでになるのだ。このままにしてくれ、何で木から降ろすのだ」というが、僧たちは聖人を解き放つと、聖人「南無阿弥陀仏、自分を殺す者がおります。おーい、おーい」と、大声で叫ぶ。

しかし、僧たちは大勢集まって、聖人を解放し木から降ろし、僧房に連れて行った。僧房の弟子たちは聖人を気の毒がって泣きあった。一方、聖人は正気を失いすっかり気がふれて、二三日ばかり後に亡くなった。

信心に篤い聖人といえども知恵がなければ、このようにも天狗にたぶらかされることになるものだ。弟子たちもまた情けないありさまだ。

このような魔物と仏の世界の境界とは、全く別物で間違えようがないものなのだが、知恵のないがゆえに、たぶらかされたのだった、と語り伝えられているとか。

《コメント》

私が生まれ育った岐阜市の実家からは、西の方角に朝な夕なこの伊吹山の姿を望むことができました。この姿は私のふるさとの原風景の一コマとして欠くべからざるもので、懐かしいものです。滋賀県側からの伊吹山の姿はなだらかで優雅な姿ですが岐阜県側からの姿は峻険で、神々しささえ感じます。

この伊吹山の聖人は、この話ではただ念仏を唱えるだけで、知恵がないと批判されていますが、三修聖人は実在した人物で、東大寺の僧で「伊吹山寺」を創建した高僧とのこと。この話とはかけ離れていたようです。

念仏を唱えることをもっぱらにすることを、この話では否定的に描かれていますが、これが鎌倉仏教になれば、理想的な僧の姿になるのではなかろうかと思えます。

また気になるのは、この話では「テング」に騙されたとしていますが、そのテングは最後まで登場していませんし、その痕跡もないのに、テングと断定をされているのが、不思議です。当時不思議な現象については、テングの仕業ということにされたとみえます。

この伊吹山は古来、山岳信仰の聖地でもあったといいます。現在、頂上には「古事記」の英雄・日本武尊の像が立っています。また伊吹山一帯は昔から薬草の産地として有名です。

なおこの話に出てくる白毫は、仏様の眉間にあるとされる、渦巻いた白い毛が作る高まりで、ここから世界を照らす光が放たれるということです。奈良の白毫

寺は椿や萩の花で有名な一度は訪れたい寺です。

新型コロナウィルス禍愚考（その10）

明石　幸次郎

コロナ感染拡大が続く都道府県の知事の要請を受けて、政府は1月7日に緊急事態宣言を1ヶ月の期限で行うとしましたが、その間に、感染者数が思惑通りには抑えられなかったので、3月まで延期せざるえない状況となっています。

宣言の発令に際して、菅首相の宣言に到る過程説明と国民に自粛要請のお願いとお詫びなどが報道されてますが、相変わらず原稿を間違いなく読むことだけに重きを置き、時々うつろな目をカメラに向けては、又、原稿に目をやり、ただそれを読むだけで、学生時代に空手で鍛えた？という気合と気概が微塵にも感じられません。これでは、トップの言葉として国民の我々には何にも響いてきません。

これは、安倍内閣時代の7年と数ヶ月の長きにわたり内閣官房長官をしていた時の延長線で、肩書きが首相というトップになっただけで、この人の頭の中味は安倍さんの失態、失政をどう弥縫策を講じて、誤魔化して話すか、又は、論点を逸らすか、コメントを避けるかして切り抜けるかに、能力と精力を傾けてきた習性が身についたまんまで、首相の立場で話すと言う自覚、センスは無いんでしょうね。

この国のトップとして、国民の為の政治と言っているだけで、主体的能動的にこのコロナ危機をどう国民と共に切り抜けるかという、考え抜いた知恵と自分の言葉を持たないで、虚勢と虚栄の甲冑を纏う権力者そのもので言わば、居抜き内閣の官房長官的首相なんでしょうか！

1月31日付けの読売新聞に編集委員の記事として、元副総裁の後藤田正晴さんが30年前に言われた事が載っていましたが、後藤田さんは、中曽根内閣で長く官房長官を務めて、その功績でポスト中曽根の最右翼の総理候補と言われた時に総理を断った理由として、「自分は79歳という歳で余りにも高齢だ。孤独に耐えられる激務は70歳以上では務まらない」又、「床柱を背にして座れる人は、生まれ、育ち、修練による、風格と雰囲気がありそれがないと本人も国も『不幸』だと考えた」と言ったといわれている。周りから、担がれても自分には、首相の器ではないと固辞したということです。

今や、人生百年時代時代であり、年齢の制約は必ずしも当てはまらない。むしろ、年齢が風格をたかめるなら、高齢の方がいい場合もあるだろう。不器用でも風格と雰囲気のあるリーダーならば、無理に苦手なパフォーマンスをしなくても、コロナ禍の不安を癒やせる、と菅さんに期待度を含めて書いていました。

また、菅首相は、3月までの緊急事態宣言延長、それに伴う不要不急の外出自粛要請に対しては、国民に不自由を強いて申し訳ないと、詫びて、この責任は自分にあると言っています。

責任を伴った決断が出来るかは、どれだけ熟考してきたかと言う経験値と比例します。それまでの人生でどれだけの本を読んで、多元的にもの事を考えてきたか。自分が得意とする分野とは関係のない知識、教養、経験と修練をどれほど貪欲に積んできたか。そうした人間の幅の様なものを持っていなければ、トップとしての、説得力のある言葉がその人からは生まれてはきません。

国民に対する説得力が伴ってこそ「責任を持つ」ということが言葉として響いてくると思いますが、菅首相が言う責任は、何か居直った上辺だけの言葉としか、聞こえてこないように感じます。この非常時に、安倍さんに次いで同様なトップを持った我々国民の何ともいえない不幸を思わずにはいられません。

又、菅首相は、1月27日の参議院予算委員会で野党議員の「コロナ禍で仕事を失ったり、パートの収入が減って生活が困窮したりする人達への支援策を考えているのか？」という質問に対して、何か考えているのか、いないのかは具体的に答えずに得意のはぐらかし答弁をした最後に、「最終的には生活保護という制度がある」と答えました。国民が知りたいのは、経済的に困窮する弱者への生活保護を受けなくても済む具体的な救済策を考えているかで、この様な鼻を括ったような役人的答弁を聞きたいのではないと一段と失望しました。

私自身、ボランテアの12月「いのちの電話」で受けたことがあるのですが、シングルマザーで、コロナで仕事を失い、貯金も底がつきて、頼る親、兄弟、知人もおらず、最後の頼りとして生活保護の申請に行ったが、窓口で係りの役人から、人としての尊厳、プライドをなくさせるような、数々の嫌な質問を受け、受給させないようにしているようにしか感ぜず、痛く傷つき、受給申請は諦めて、もう親子で死のうかと思っているとの怒りと悲しみの悲痛な声でありました。まさに、社会から見捨てられて、ひとりの30代の女性が追い詰められ、死を考えてしまうようなしんどい話でありました。話を聞いて、生活保護制度は、「経済的に困窮する国民に対して国や自治体が健康で文化的な最低限度の生活を保障する公的扶助制度である」と法律で定められているし、憲法にも国民の権利として保障しているので、あなたは国民の権利として、堂々と申請すればよいのですと、話を色々と雑談をし、相手の思い詰めた感情を少し

は和らげながら、死んだらアカンと激励をしましたが、同時にここまで困った人に対し冷たくする役人とそうさせる社会福祉制度に腹が立って仕方がありませんでした。

菅首相は、自分は貧しい田舎者の身から、大志を抱き奮迅の自己努力でもって学校を出て、何の地縁、血縁の無い地盤から市会議員を経て国会議員になり、トップにまで上り詰めたような雰囲気をただよわせ、自分の名前を「がーす」と呼んで欲しい？と洒落にもお笑いにもならない演出をしていますが、この様な人物ほど権力を持つと自分には何の利益をもたらさない大多数の国民には冷淡で自助努力と言いながらも、利益をもたらすと、おもねって近寄ってくる人に対しては共助と公助を行い暖かくする、まさに権力をかさにきて自助努力する、良き隣人ですらない宰相なのでしょうか?!

オクラの山たより（５３）

困了生

一

一七七七（安永六）年、蕪村六十二歳の作とされる次の句は筆者の愛句の一つです。

① 身にしむや 亡き妻の櫛を 閨に踏む

「身にしむ」は秋のひんやりとした気配がただよってきて、ひときわ身にしみて心細さが募るさまのこと。「身にしむ」は「万葉集」のころは季節に関係なく「もののあわれ」をしみじみと感じるさまであったのですが、平安時代末期の藤原俊成の次の歌が「身にしむ」のイメージを決定づけました。

夕されば　野辺の秋風　身にしみて
鶉（うずら）なくなり　深草の里

この和歌以降は「身にしむ」のは「秋風」という連想は固まりました。芭蕉でもその連想は存在し

ア　身にしみて　大根からし　秋の風
イ　野ざらしを　心に風の　しむ身かな

ただし、イの句で俊成以来の和歌の伝統の上に「野ざらし」＝「髑髏（されこうべ）」を心に抱いてなどという人を仰天させる言葉を持ってくるあたりは俳諧の独創性とでもいいうるところでしょう。もちろん蕪村の句も秋風とは関わりのない「身にしむ」の試作です。句意は以下の通り。

秋冷の寒さがこたえる夜、閨（ねや）の隅で亡くなった妻愛用の櫛がふと足に触れた。その瞬間だ、しみじみと愛する妻を亡くした悲哀が感じられのは。その悲哀がひしひしと心の奥底まで身にしみこんでくる。

この悲哀は膝小僧を抱えて独り寝をかこつ哀しみでもありますが、妻と過ごした楽しい記憶、徐々に死が近づいてくる独り身の余生の不安、などさまざまな思いが包み込まれたものなのでしょう。

しかし、明治の人正岡子規は以上のような句意にはとらず、この句には「小説的な趣向がある」と激賞しました。

問題となるのは「身にしむ」のとらえ方の違いです。先ほどは亡き妻への追憶の思いが「身にしむ」ことだとしましたが、いや、この「身にしむ」は背筋がゾッとしたことなのだ、というとらえ方があります。それでいくと①の句意は次のような具合になります。

秋風に寒さを感ずる頃に閨の隅で亡き妻の櫛を見つけたまでは同じ。今まで気づかなかった櫛が今あることを不審に思うが、亡き妻の亡霊が恋しい夫の家に帰って来たのかと思うと、ゾッとして冷気が背筋を走った。

「雨月物語」を書いた上田秋成は蕪村の友人で内容は「雨月物語」の中の「浅茅が宿」とよく似ています。確かに怪談話をもとに句作をしたのだというのも一理あり、です。

この解釈によれば蕪村と門人たちによる連句集「五車反故」（一七八三（天明三）年刊）にある蕪村最晩年の連続した二句

小春の月の　雨暗き夜
亡き妻の　子をふところに　通ひ来し

と同じ怪奇趣味の句であるといえます。こちらの方が①の句よりも子ども連れだけに怖さが一段と勝るかもしれません。蕪村が妖怪・怪奇談好きなのは以前にも紹介しましたが、晩年に至っても同様であったようです。

と、ここまで書いてきていまさらなのですが、実は蕪村の妻は蕪村の死を看取り、その後三十余年は生きた女性でした。しかも亭主を家に置き去りにして一人娘といっしょに芝居見物に出かける元気のいい奥さんでもありました。ですから①の句は想像の句で、おそらくは仲間との句会の中で詠んだ句なのでしょう。

実をいうとこの①の句を詠んだ当時、蕪村とその仲間たちは面白い試みをしていました。月一回の例会のたびに百の季題をもうけてその場で参加者が句作をするというもの。「身にしむ」もそんな場で出された季題だった可能性があります。それというのも蕪村の弟子であった几董に①の句と同じく安永六年の作として次の句があるからです。

身にしむや　袖に足入るる　夜のもの

師弟同席の句会で同一季題によってよみ

比べすることは当時ごくふつうにあったことだといいます。それにしても句会の参加者一人一人が百句も詠むのは大変なことと思いますが、蕪村はパトロンであり門人でもあった人への書簡の中で「初心」の者でも百句を「二時（ふたとき）ほどのうちに」よみあげたといっています。「二時」といえば四時間ほど。だいたい二分間に一句ということになります。まさに速吟です。俳句修行の一環で今でも速吟があるとききますが、蕪村とその一門は短時間で多くの作品を読むことを勉強会として行っていたのでしょう。そして、その中から①の句が生まれてきたのです。

二

さまざまな史料からすると蕪村が妻を迎えたのは一七六〇（宝暦一〇）年の秋ことらしく蕪村はすでに四十五歳となっていました。妻の名は「とも」。このころから蕪村は与謝蕪村と姓を名乗っていますから妻である「とも」も「与謝とも」としており、蕪村の死後は与謝清了尼と名乗っていました。

先ほど述べたように夫である蕪村との死別後三十余年生きていますから、二十歳近く年齢差のある夫婦であったようです。「与謝とも」の生まれはどうも京都ではないらしく、それは次のような書簡からも分かります。宛先は門人で灘の酒造家であった松岡士川。日付は一七八一（天明元）年閏五月二十七日です。

御旅宿御見舞も申しあぐべく候ところ、田舎より愚妻縁類どもまかりのぼり、ことのほかもやもや仕り候て、万一御見舞も仕らず候はば御恕量下さるべく候。云々。

この「田舎」がどこであったかは分からないのですが、五年ほど前に蕪村の書簡が新たに発見されて、そこには妻の妹が河内から出て来て二、三日滞在したことや娘の「くの」が手習い（習字）を始めたことが書かれています。この書簡によれば妻の実家が河内らしいということにはなりますが、河内が妻の妹の奉公先または嫁ぎ先という可能性もあるので、妻の実家の所在地は不明というしかないでしょう。そのほかにも丹後の出身という説もありますが、確実な証拠がないのでやはり不明といわざるをえません。

「与謝とも」がどのような女性であったかについて蕪村は何も書き残していません。しかし彼女の死後に刊行された「近世名家書画談」には蕪村の妻が「黠性（かっせい）」すなわち悪賢い女性で夫の没後にびっくりするほど値が高くなった遺画を求めるため、わざわざ日光あたりまで出かけたことが書かれています。確かに一人娘を抱えた未亡人が金銭欲に目がくらんでということもありうる話ですが、次のような事実があります。

蕪村の死の十二年後一七九五（寛政七）年の秋のこと。俳人仲間の必化坊五雲とその妻妙雲尼が江戸に帰る時の送別集「あきの別れ」に「与謝とも」の送別の句がみえます。

五雲のぬし妙雲尼を伴て故郷に帰り玉ふを
とりまぜて　秋をひとつの　別れかな
与謝氏　とも

また、蕪村の「半江の斜日片雲のしぐれかな」の句意を月渓（四条派の祖である松村呉春）が描いた傍らにをはじめとして琴写」として薄墨の略画を描いた扇面があり、その「琴写」の所に後人が「蕪村室」と書いた紙をはっています。すると「琴」は蕪村の妻の画号なのでしょう。写真で見る限り「琴写」の筆蹟はまったくの蕪村風です。「与謝とも」がこうした俳諧も絵もできる文雅の才のある女性であったすれば「近世名家書画談」に書かれた「黠性」の女性という伝説もにわかには信じられないものとなります。

「与謝とも」の死は一八一四（文化十一）年三月五日のことでした。亡骸は遺言によって洛北の金福寺にある夫の墓の中に葬られています。この金福寺には蕪村の墓を詣でた人たちの記念句帖ともいえるものが残されており、門人の几董をはじめとして明治に至るまでの人々の言葉が自筆のままに残っています。そのなかに与謝清了尼の人となりを伝えるものがありました。

清了尼世にいましける折りは、膝をすりよせ春はあぶり餅をすすめられ夏は団の世話までなし給ひけるも、終に散る花とともに黄泉の旅におもむき給ひしも今日にぞ成りたれば、初月忌の法筵に並びはべりて
この庵の　若葉の露を　手向け水
文□

「□」は判読不明の部分です。「団の世話」とは俳人仲間の集まりの世話をしたということでしょうか。はっきりと分かりません。これを読む限りでは経済的に貧窮の状態であったとは考えづらく、亡き夫の後に続く京の名もなき俳人たちの面倒も見た人柄のよさそうな女性に見えます。

では、蕪村と「とも」。二人の関係はどうであったか。それを示す資料が一点だけあります。京都御所の東、三本木の料亭杉月楼から出した手紙で、時期は一七八一（天明元）年のこと。蕪村六十六歳の書簡です。

昨日より杉月に居続けいたし、少々二日酔いの気味。今日は東山へ参り候て、是非とも今晩は帰り申し候。
小袖・唐紙・硯箱・机の上の草稿一冊・十徳・扇・たばこ少々、右の品々、追っつけ佳棠子（の）供、よせ申し候

間、早々御越し下さるべく候。
廿三日　夜半
おともどのへ
用事

末尾の「おともどのへ　用事」の「おとも」とは妻である「与謝とも」のこと。「殿」と妻に対して敬語を使っているところがおもしろい。信頼している妻に少しばかりふざけているのか、それとも妻に頼み事をするという具合の悪さからへりくだっていっているのか、どちらでしょうか。もちろん「夜半」は夜半亭蕪村のことです。

書簡の内容は昨日から三本木の料亭杉月楼に居続けて少々二日酔いだが、今日は絶対に帰るから、ということ。そして今日は東山にある洛北の金福寺に句会に行くので、句会に必要な「小袖・唐紙・硯箱・机の上の草稿一冊・十徳（俳諧師などが外出用に着た着物）・扇・煙草少々」を「佳棠（書肆汲古堂主人）」の「供寄せ申候」（供の者をそちらに立ち寄らせる）から「御越し下さるべく候」（持たせてやって下さい）ということです。この書簡をもって蕪村は亭主関白であった、という評価もありますが、どうでしょうか。

画家で俳諧師でもあった蕪村は寺院や料亭などに泊まり込んで絵を描くことも多々あったでしょうし、当時の俳人や俳諧愛好者を集めた句会は料亭で開かれることも多かったですから、この書簡に書かれたことなどは蕪村と結婚して二十年余の「与謝とも」にとって日常的なことであったのではないでしょうか。そして、この書簡には何よりも妻への気遣いも感じられませんか。そういうところからすると蕪村と「とも」とはきっと仲のよい夫婦であったろうと想像されます。

三

時代が遷りそして世が変わっても、また、いかなる土地の人であっても家庭の安寧を願わぬ人はいないでしょう。その日その日が平話に無事に暮らせたらこれ以上の幸せはない、小難しい理屈はさておき、これが筆者も含めた庶民の本音です。夫婦相和し親は子を限りなくいつくしむ、そんな平凡な家族愛に包まれた生活を望む夫は多いはず。しかし、その一方で妻や子をときにはうっとうしく思い、そこから逃れたいと思う夫が多いのも日常よく見られることです。

蕪村やその門人たちもそうした平凡な人びとの姿を句に詠んできました。まず蕪村から四句。

②　端居して　妻子を避くる　暑さかな
③　妻も子も　寺で物食ふ　野分かな
④　妻や子の　寝顔も見えつ　薬喰
⑤　冬こもり　妻にも子にも　かくれん坊

②の句は①の句と同じく安永六年の作。「端居（はしい）」とは、夏の暑さを避けるため涼を求めて縁側にいることです。

京都の夏はなんといっても暑い。本当に耐えがたい暑さです。その昔、吉田兼好が「家の作りやうは夏をむねとすべし」といったのも、よくぞ言ったと感心するほどです。蕪村の住んだ家は風のよく通る一戸建てとはいかず下京あたりの長屋の一角でした。そのため夏は暑熱がこもって蒸し風呂状態だったにちがいありません。その上、女・子どものキンキンとうるさい声が響いてきてはたまらない、もう勘弁してくれ、というのが夫のいつわらざる心です。最愛の妻だろうが溺愛している一人娘だろうが関係ない、ここは逃げ出すほかはないと思うものの我が家にはそんなスペースはなく、といっても太陽照りつける外に飛び出すわけに行かない。そこで蕪村が思いついたのが縁先です。家庭内避暑というささやかな抵抗ですが、六十二歳にもなった家の主人が家の隅っこの方にいるというのはなんとも情けない姿であります。しかし、妻や娘という二人の女がでんと家に居ては夫の居場所は家の隅っこにしかないよ、という心持ちは蕪村と似た家族構成をもった筆者にもよく分かります。

しかし、そうした夫の本音が書かれる一方で、この②の句からは少しばかりのほろ苦さとともに暖かい家庭の雰囲気が伝わってきます。この句には市井の人びとの一コマが描かれていますが川柳にはない詩的な風味とでもいうものが漂っています。それが蕪村の俳諧独特のユーモアでしょう。

③の句は台風で被災して身を寄せたお寺での風景でしょう。寺に避難した妻子が食べ物をいただき亭主は一安心というところでしょう。蕪村六十八歳、最晩年の句です。空腹を満たして幸せそうな妻子を見ている安堵顔の夫。作者の優しいまなざしが感じられます。

④の句は妻子を先に寝かせて蕪村は月見といった風流事に向うと思いきや妻子には内緒で「薬喰（くすりくい）」をしようというのです。「薬喰」とはイノシシ、ウサギやシカの肉を食べること。もちろんこれは仏教の殺生戒を破ることでした。その後ろめたさとうまいものを独り占めするやましさ。どちらが勝ったのでありましょうか。しかも妻や娘は薬喰を嫌ったらしく次の句もあります。

しづしづと　五徳するゑけり　薬喰

蕪村が薬喰をするためには妻子にばれないようにこっそりと準備をしなければならなかったようです。

⑤の句は家族にかかずらううっとうしさから逃れていっとき孤独になりたくて身を隠そうとした情景です。本当にどこかに雲隠れしたわけでもなく子供じみたことだが一人になりたいという意識があるからこそ子どもが使うような「かくれん坊」という言葉を使ったのでしょう。

もちろんこのような夫婦や家庭の風景を句に詠むのは蕪村の独壇場ではありません。弟子たちも多くの句を詠んでいます。たとえば几董には次のような句があります。

紙雛の夫婦（めおと）乏しき火（ほ）かげ哉

いたく降ると妻に語るや夜半の月

ひたと咳（せ）く子に寝かねたる朧月夜

いとし子に毛虫とりつく端居かな

最初の二句はささやかな暮しを営む夫婦の姿です。貧しい生活の中でも、せめて紙で作った雛を飾って娘の幸せな成長を願う夫婦。そして夜が更けて降りしきる雪に包まれ「よく降ること」と語り合う夫婦。どちらもどこにも見られる夫婦の姿です。

後の二句は我が子を慈しむ親の姿です。前の句は霜の降りる寒い夜、子の咳が止まらないのを気にして寝られぬ親の姿。後の句は涼しさを求めて縁側に出たのにいとし子に毛虫がついているという親の驚き。いずれも子を持つ親の気持ちがよく現れています。しかも一定の品格を持っています。さすが蕪村の一番弟子です。

ついでにいうと天明俳諧の人間派ともいうべき炭太祇には次の句があります。

やや老いて初子（ういご）を育つる夜寒かな

初老の身になってはじめて授かった子どもはかわいいものです。秋の夜風に風邪でもひきやしないかと心配する両親。今でもよく見られる風景です。蕪村が一人娘の「くの」を授かったのは四十六、七歳の頃。「やや老いて」といっても不思議ではない年齢です。蕪村の娘の溺愛ぶりは有名でしたから、ひょっとしたら蕪村夫婦を句に詠んだのかもしれません。

四

さて、最後に蕪村のおのろけの句を紹介します。それも自分の妻を「うつくしき妻」と詠んだ句です。ふだん自分の妻のことを「うちのカミさん」といっている筆者も含めて自分の妻を「美しい」と公言する男はまずいないでしょう。そんなことを口にする男はよほどの果報者か、心にやましいことがあるのか、筆者の知る限りいません。しかし、蕪村は堂々と次のような句を作っているのです。

腰抜けの　妻うつくしき　巨燵（こたつ）かな

一七六六（明和三）年、蕪村五十一歳の作。この句を普通に読めば腰抜けになって妻が身動きできず、その姿が美しいというだけのように見えます。それだけではあまりにも芸がなく、俳諧の面白さを感じられません。もう少し句の内容を検討します。

まずは「巨燵」です。コタツは私の学生時代でも京の寒い冬の暖をとるには欠かせない器具でした。上に布団をかぶせてあるのでポカポカと体全体が暖まります。しかも上に板も置いていたので机代わりともなりました。蕪村の時代は冬の京都の必需品であったでしょう。そして、暖かいコタツに一度入れば出たくなくなるのは人情です。さきほどの几董にこんな句があります。

辞儀して　皆足出さぬ　巨燵かな

誰が来てもズボラをきめこんでコタツから動こうとしない、コタツの特権です。

では、この「巨燵」と妻が腰抜けであることはどうつながるのか。確かにコタツに入っている間に足がしびれて動けなくなった妻ととれないこともありません。しかし、それではおもしろくない。ここは先ほどのコタツは人をズボラにする、怠惰にするという点から見てみたいと思います。

金福寺に残された記念句帖から想像できる「与謝とも」の姿は世話好きで細かいことのあれこれによく気のつく人であったようです。おそらく蕪村の生前にあってもクルクルとコマネズミのように動き回って家の中の仕事をパタパタと片づけていくしっかり者の女房殿であったことでしょう。考えてみれば自分の仕事以外に何一つ家事はしない亭主殿は今でも普通に見られます。ましてや二百年前のこと。蕪村が画業と俳業に専念する一方で家事や溺愛する娘の育児に精を出したなどということは考えられず、こうした亭主の女房は働き者でなければつとまらないでしょう。その女房殿が「フーッ疲れた」と一息ついて何気なくコタツに足を入れたとたん、もう立ち上がれなくなる。ひょっとしたら疲れでウトウトとしてしまったのかもしれません。あの働き者の女房殿が腑抜けの女房になった、そんな情景を「腰抜けの妻」といったのではないか。筆者にはそう思えます。

魂が抜かれたようにぬくぬくとしたコタツにふとんに包まれて眠りこけている女房殿。これを見た蕪村はふだん見たこともない妻の様子に「ああ、オレの女房もこうしてみると美しくかわいいじゃないか」とあらためて惚れ直したことでしょう。働き者の女房殿はパタパタと忙しく動き回っているのがいつもの姿。こうして妻をじっくりと見ることもなかったのですが、コタツが妻の真実の姿を教えることになったのです。

コタツの中に入ったら疲れで眠りこけてしまった妻。「腰抜け」の語の後には普段のかいがいしい妻の姿があります。ふと見せた妻のしまりのない姿に妻を見直した一句で、蕪村が妻に寄せるいとおしさが伝わってきます。

この句が作られたのは蕪村五十一歳の

時ですが、この年に画業のため蕪村は京を離れて讃岐へと赴いています。今でいう単身赴任でしょうか。その留守中のことを知人に頼んだ書簡が残っています。宛先は召波。名は黒柳清兵衛。蕪村と親しい俳諧仲間です。必要な部分だけを抜き出します。

讃州へむけ発足仕り候。帰期は知れがたく候。もっとも留守中ただいまの通り、賤婦相守りまかりあり候間、このあたり御行過（ごぎょうか）の節はおりおり御訪ねくださるべく候。殊更、嬰児もこれあり候故、留守中、心細きことにござ候。諸方知己の御方、おりおり御尋ねくださるべく候を力に仕り候間、かならずかならず御尋ねくださるべく候。

「賤婦」とは「愚婦」に同じく自分の妻の謙称。この書簡の場合、相手に用件を頼んでいるので必要以上にへりくだった言い方をしています。このとき妻の「与謝とも」は三十歳を少し過ぎたくらいで、まだ若い。「殊更」は「ことさら」と読んで「とりわけ」「特に」の意味。「嬰児」とは四、五歳になった娘の「くの」のこと。まだ若い母親と幼い娘の二人になった留守宅のことが心配で、折りある毎に留守宅を訪問してほしいといっています。同じ内容の依頼を召波以外の知人にもしたらしいのですが、「かならずかならず」とクドクドと言っているあたりには蕪村の妻子への思いがにじみ出ているようです。

隠された歴史（２８）

満田　正賢

前回は筑後の高良大社神籠石（こうごいし）・大善寺玉垂宮（たまたれぐう）・岩戸山古墳を初めとした古墳群によって、倭の五王・磐井と続いた前期九州王朝の存在を考古学的に考察しました。今回はもう一度博多湾岸に戻って、後期九州王朝の存在を考古学的に考察します。

まず考察の対象となる私の仮説をご紹介します。「日本書紀には、磐井の乱によって継体が前期九州王朝を滅ぼしその後宣化が博多湾岸に『那津官家』を設置したという史実が粉飾されて記載されているが、『那津官家』に入って後期九州王朝を建て、倭国王を継承したという日本書紀が完全に秘匿した史実がそれに続いているのではないか」というのが後期九州王朝の成立に関する私の仮説です。後期九州王朝の成立時期は、磐井の乱（五二八）の後、宣化による「那津官家設置の詔」（五三六）に始まり白村江の敗戦（六六三）によって大宰府にあった倭国の都が近畿（近江京）に移動するまでの間の期間になります。

「隠された歴史（８）」で考察しましたが、日本書紀の記述には宣化元年（五三六）の那津官家設置の詔の記事以降、推古一七年（六〇七）の筑紫の太宰の初見まで七一年もの間、百済本記を転用したと思われる記事以外には「筑紫」の状況を記した記事がありません。天皇名で言えば欽明、敏達、用明、崇峻の四代に渡り、継体・安閑・宣化期に重視した筑紫に関する記事が空白です。ここには「筑紫にあった何か」が隠されているとしか考えられません。

一方で私は、この期間の倭国（後期九州王朝）と近畿の勢力の力関係についても独自の解釈をしています。私は「隠された歴史（３）」で『日出処の天子―阿毎多利思北弧』の国書奏上記事は、「蘇我馬子が法興寺（飛鳥寺）の内部の充実の為に、後期九州王朝に圧力をかけて自ら『日出処の天子』と称した国書を持参させたものあった」と考察しました。又「隠された歴史（４）」で「古田史学が九州王朝の制度とする評制は『天下立評』の行われた六四五年以前に蘇我氏が準備した制度である」と考察しました。この二つの考察を綜合すると、この時期には、名目的な九州王朝の全国支配と併行して近畿にいた蘇我氏による実質的な全国支配が始まっていたということになります。

推古一七年（六〇七）に日本書紀に初めて現れる筑紫の大宰は、蘇我馬子の絶頂期であることに注目すると、蘇我氏が後期九州王朝を監視する役割で設置した役職ではないかと考えられます。「太宰」という役職は中国では天子を補佐する参与の中での最高位であり太師と同意語ですが、日本書紀には、筑紫大宰の他にも天武八年に吉備大宰石川王崩御の記事がみられることから、日本独自の役職名と考えて良いと思います。後代に現れる鎌倉幕府の六波羅探題や江戸幕府の京都所司代と同じです。

倭国（後期九州王朝）の都には、私自身も今まで大宰府という名称を使ってきましたが、この名称は近畿王朝の政権完全奪取後に正式に付けられた名称ではないでしょうか。また、現在の大宰府政庁跡には「都督府古趾」という碑が立っており、地元の人は大宰府ではなく都督府とか都府楼と呼んでいるようですが、この「都督府」という呼び名も白村江後の筑紫都督府成立後の呼び名だと思われます。なぜなら筑紫都督というのは唐の冊封体制下の役職の呼び方であり、元号（九州年号）を制定していた後期九州王朝の都の名前にはそぐわないからです。では後期九州王朝の都は何とよばれていたのか。それは「倭京」であると思います。九州年号に「倭京」という年号があり、倭京元年は六一八年です。日本書紀の推

古一七年（六〇七）に記された筑紫の大宰は、今の大宰府が出来る前、恐らく那津官家に都があった時に、蘇我氏の命で那津官家に派遣され後期九州王朝を監視していた役職と推測します。

今回紹介する考古学的事実は、筑紫にあった倭国（後期九州王朝）の政治的権威と同時に、後期九州王朝の配下でありながら次第に全国的な経済支配を進めた近畿勢力、特に、五八七年の蘇我物部戦争勝利後に近畿勢力の長となり、仏教導入を進めた蘇我氏の存在を説明しています。

まず、注目してほしいのは、前々回紹介した大阪歴史博物館主宰のシンポジウム「古墳時代における都市化の実証的比較研究―大坂上町台地・博多湾岸・奈良盆地―」の結論が「大坂上町台地と博多湾沿岸では古墳時代に都市化が進んでいたが、奈良盆地では都市化が進んでいなかった」ということです。

久住猛雄氏は同シンポジウムでの報告「列島最古の『都市』―福岡市比恵・那珂遺跡群」で、「このような比恵・那珂遺跡の『初期都市』といえる様相は、古墳前期前半までであり、前期中頃以降には急速に衰退し、首長居館と目される『二号環溝』周辺は『居館域』として前期末まで維持されるが、古墳中期初頭には全域で遺構分布が激減してしまう」と説明した後で、「ところが、古墳中期末の剣塚北古墳の築造を契機ににわかに集落が段丘の複数箇所で形成され始め、かつてのメインストリートの『交差点』に築かれた三重周溝を有する東光寺剣塚古墳の築造頃（古墳後期前半～中頃）には集落も大きくなり、（中略）『那津官家』関連遺構群を嚆矢として、比恵各地区そして那珂の各地区に倉庫群や初期官衙遺構群が広く形成されるようになる。古墳後期末から飛鳥時代中頃にかけては、比恵・那珂は『第二の都市化』の時代を迎え、国家的な外交・軍事の前線機関・基地が成立したとみられる」と述べています。

又、この久住氏の報告に関連して、同シンポジウムで菅波正人氏が「那津官家から筑紫館―都市化の第二波―」という報告を行っています。その中で、「倉庫以外では、側柱（桁行二六・六ｍ、梁行三・一ｍ）とそれをはさむように三列の柵状遺構が検出された。時期は六世紀後半～七世紀に位置づけられる。奈良時代の群衙の政庁に見られる『ロ』の字に建物を配置する構造から前述の倉庫群の管理に関わる施設の可能性が指摘されている」と述べています。

久住氏や菅波氏は、古墳後期から飛鳥時代中頃（六世紀～七世紀）の比恵・那珂遺跡群の存在を日本書紀の記述に従って、那津官家や筑紫館の証拠として考察しています。那津官家は屯倉＝倉庫群、筑紫館は外交施設としてあくまで大和朝廷の出先機関として認識されています。しかし前出シンポジウムが「大坂上町台地と博多湾沿岸では古墳時代に都市化が進んでいたが、奈良盆地では都市化が進んでいなかった」と結論づけたように、実体は大和の同時期の遺跡をはるかに凌ぐものです。

ここで視点を変えて、古代瓦の使用について考察してみたいと思います。近畿における瓦葺屋根建造物は五八八年に建造された法興寺（飛鳥寺）が最初であり、その後山田寺・百済大寺・川原寺など大寺の建築に使われ、宮殿建築に使われたのは持統八年（六九四）に完成した藤原京が最初です。なぜ近畿では七世紀末まで寺の建築にのみ瓦が使われていたのでしょうか。

六〇〇年に「日出処の天子―阿毎多利思北弧」の国書を受け取った隋の煬帝の都は洛陽ですが、論文「隋唐洛陽城出土瓦の製作技法（石自社・韓建華）」を見ると、その遺跡からは大量の瓦が出土しています。当然倭国の王は隋の宮城に習って瓦葺屋根の宮城を建造する誘惑に駆られたはずです。

又、日本書紀によれば日本への瓦の伝来は崇峻元年（五八八）に法興寺建造のため百済から瓦博士四名が派遣された年とされていますが、論文「日韓における六～七世紀の瓦の関連性についての検討（李仁淑）」によれば、六世紀末～七世紀前半のものとして、大宰府市・大野城市・春日市の各遺跡（窯跡）の他、福岡市那珂遺跡からも大量の瓦が出土しています。那珂遺跡では、竪穴住居跡・井戸・那珂八幡古墳周濠などから軒丸瓦が出土しており、仏教寺院以外の建造物にも瓦が使われたことを示しています。この論文では日韓における六～七世紀の瓦を比較した結果として、「九州地区における初期瓦の様相がこのように多様なのは、畿内地域とは異なり、大規模な仏教寺院建立を目的としていなかったためと考えられる。九州では既往の須恵器生産窯内で瓦生産を開始したため、当初は須恵器とともに少量の瓦を生産するシステムの下で須恵器の製作技法にならったが、徐々に本格的な瓦製造技法が適用される。これに対して、畿内では瓦が百済地域と共通性を有しながら須恵器窯とは完全に異なる構造、別途の場所で飛鳥寺の屋根全体を覆う目的のもとに大規模な生産が行われた」と考察しています。

古田史学の中には法興寺の所在地を九州に求める人もいますが、日本書紀の「蘇我大臣もまた、本願のとおり飛鳥の地に法興寺を建てた」という記述と飛鳥寺跡の瓦の出土物という物証が一致しており、法興寺は飛鳥寺であり蘇我氏の氏寺であることを認めて九州王朝論全体の仮説を立てる必要があると考えます。なぜ近畿では瓦の使用が仏教寺院に限定されており、宮城への使用を七世紀末の藤原京まで待たなければならなかったのか、一方でなぜ那津官家・大宰府等では六世紀末

から仏教寺院以外の建造物に使われたのか、私の提示した仮説はその謎を説明出来るものです。蘇我氏は蘇我馬子の父である蘇我稲目の時に宣化によって初めて大臣に起用されています。恐らく九州王朝を凌駕する実力を持ち始めた蘇我馬子にしても、瓦葺屋根をもった、すなわち宮城と見做される建物を建てることは憚れたのでしょう。一方後期九州王朝は、最初は独自の技術で、そして途中からは朝鮮半島の技術を入れて瓦葺きの宮城その他構造物を造っていった。そして那津官家を離れて倭京（大宰府）という本格的な条坊都市を作り上げた。私はそのように考えます。

「かくされた歴史（14）」において私は、「大宰府は白村江の敗戦（六六三年）の後、六六五年に大宰府の周囲に広がる大野城・基肄城（きいじょう）および水城（みずき）の築城が始まり、七世紀後半から八世紀前半にかけて大宰府政庁の第一期造営が始まったとされています。しかしこれは日本書紀の記述に沿った見方です。実際には大宰府築城の時期がもっと早かったと推定出来る証拠が発見されています。大野城大宰府口城門から出土した木材の伐採年がX線CT撮影により六五〇年であることがわかりました。大宰府近辺からは百済系単弁軒丸瓦と称する瓦が多く出土していますが、この瓦は畿内で出土すれば素弁蓮華文軒丸瓦と称されるもので、飛鳥寺・法隆寺・四天王寺などから発見されている瓦と同じ文様の瓦です。近畿で発見されれば間違いなく七世紀前半（六〇〇年～六三〇年）のものと断定されるものです。」と紹介しました。

ここで内倉武久氏が書いた「太宰府は日本の首都だった―理化学と『証言』が明かす古代史」（ミネルヴァ書房）という本の内容をご紹介します。内倉氏が画いた九州王朝の姿は古田史学の代表的な見方に近いもので私の仮説とは異なりますが、この本の中で内倉氏は重要な指摘をしています。「①世界の考古学界では日本の土器編年法は信用されておらず、年輪年代法とあわせて、補正値を加味した放射性炭素14C測定法の測定が最も信用できる年代測定法として、日本を除く全世界で使われている。②日本に於いても、文献で確かめられる鎌倉時代以降の遺物の14C測定法では、測定結果が文献の年代と完璧に一致している。③大阪府堺市の陶邑（すえむら）で発掘された須恵器では土器編年法の年代と14C測定法で測定された年代が、ぴったりと一致する。④ところが、九州や関東、東北の遺跡を14C測定法で測定すると土器編年法に比べて百年以上古い、極端な場合五百年以上古い値が出てくる。⑤日本の考古学者は、この14C測定法の測定値を無視するか、九州の場合根拠のないつじつま合わせをしている。」という指摘です。

内倉氏が紹介した放射性炭素（炭素14）年代測定法の信頼性については、日本の考古学学会において賛否両論が激しく戦われています。日本の特殊性に応じた日本独自の補正値が必要ではないかという議論もあります。しかし無視してよいものでは絶対にありません。今後の研究の発展に期待すべきものです。

内倉氏は大宰府近辺の遺跡の14C測定結果を太宰府早期成立の根拠としています。「太宰府市から南東へ約三十キロの朝倉町大迫遺跡。総数九十五基の火葬墓群である。（中略）出土した火葬墓群はおおむね八世紀中ごろから九世紀前半にかけて築かれたと判定された。大宰府や大阪近辺の火葬墓から出土した土器とその年代判定を参考にしながら、九州での須恵器の編年も頭に入れて慎重な年代決定をしている。このうち二四号墓の土器は一番古い部類で、大宰府政庁遺跡の中門や南門跡から出た土器より少し新しい、と考えられた。『八世紀後半のもの』と判定された。ところが火葬後に残った木炭などの14C測定値は、その判定よりやはり百五十年以上も古い五九〇年と出た。ほぼ同じ時期と見られた七八号、八四号墓もそれぞれ六〇〇年、五五〇年とはるかに古い測定値を示したのだった。この測定値の多くは、当時としては『全面的に信頼できるものではない』と受け取られた。測定値にはそれぞれ『プラスマイナス七五年』という『測定誤差の範囲』がついているが、誤差を最大にみても、考古学的な判定とは差がある測定値がほとんどだ。しかも、れっきとした火葬墓が六世紀代に築かれるというのは、歴史的には考えられないことだったのである。」「ちなみに続日本紀には、文武天皇四年（七〇〇）三月『弟子等、遺教を奉り、栗原に火葬す。天下の火葬、これより始まるなり』とある。大宰府近辺ではこれより百年以上前に火葬が行われていたのである。」

なお、内倉氏は、理化学的証拠の他に、大宰府政庁遺跡中心部に小字名「大裏」、「御所の内」が残っていることや、「大日本地名辞典」（吉田東伍撰）に明治時代まで「紫宸殿」と呼んでいた場所があったことが記されていることを傍証として上げています。これらの名称は天子が居住する宮城に使われる名称であり、出先機関の長の居館に用いられて良いものではありません。

今回ご紹介した考古学的考察は、後期九州王朝時代の「隠された歴史」を考察する上で十分な示唆を与えるものではないでしょうか。

「道をゆく」（22）

成瀬　和之

「熊野街道」（九）

佐野王子跡から大阪府立佐野高校を経て南下し、関西空港自動車道をくぐると、蟻通神社の旧社跡の石碑があります。

蟻通神社は約一五〇〇メートル南の現在地に移転させられました。

一九四一年一二月、突然陸軍は当時の佐野町、日根野村、長滝村、南中通村の一町三村に飛行場の建設を通告しました。この敷地は、南海本線泉佐野、羽倉崎（飛行場用に新設された駅）、ＪＲ日根野、長滝の四つの駅に囲まれた総面積二六四ヘクタール（現在の関西国際空港は五一一ヘクタール）の広大な地域です。

陸軍明野飛行学校泉佐野分校を造るというもので、農地、ため池、集落から神社、墓まで潰す規模でした。農家三九三戸、小作人などを含め一〇〇〇名余りが強制移転させられました。一五〇〇メートルの滑走路が海岸線と直角に作られ、その建設に地元民、学徒のほか多数の朝鮮人が動員されました。

一九四一年の太平洋戦争開戦によって防空戦が想定され、大阪の防空用飛行場として計画され、一九四二年に土地買収が始まり、建設に着手されました。一九四四年に明野陸軍飛行学校佐野分教所が発足しましたが、敗戦が一九四五年ですから、たった二年でその役目を終えました。

一九四四年六月一四日に三重県伊勢市の明野から航空士官として短期養成された陸軍士官学校五七期生が佐野へ移り、訓練を開始し、訓練生の実技訓練の場として、佐野飛行場は使用されました。一〇月二五日に課程を修了しましたが、同日、レイテ沖で海軍の神風特攻隊が初出陣し、陸軍でも特攻攻撃が行われることになりました。陸士五七期生も陸軍の特攻隊に参加し、特攻戦死者の内、五七期生で全体の五六％を占めました。

一九四五年三月の第一次大阪大空襲の時には、夜間照明のない佐野飛行場からは飛び立てず、防空の作戦行動はとれませんでした。同年四月になると、特攻攻撃が主力となり、佐野飛行場も特攻隊の訓練の場となりました。訓練は一日四〇分の搭乗時間を一ヶ月という短期間のものでした。その後、佐野飛行場は当初の本土防空の勤めを果たすことになりますが、「時すでに遅し」でした。

敗戦の一九四五年八月には、国民学校毎に一台製作した偽装飛行機を並べ、飛行機を隠すなどに学生の勤労動員が行われます。

岸和田中学（現在の岸和田高校）に一九四三年に入学した猿橋真さんは次のような証言を残しています。

「中学の一年から三年の敗戦までは勉強した記憶はほとんどなく、（学徒）動員されて、働かされたことばかりが思い出される。」「敗戦の年には、この飛行場から連日のように特攻隊が飛び立っていた。その当時の話としては、佐野から鹿児島の基地に寄り、そこではほとんど休まず、沖縄までの片道の燃料と爆弾を積み込み、すぐ出撃したとのことで、佐野が言わば最後の休憩地であったということだった。」「滑走路わきに並んで、特攻隊の出撃を見送ることになったが、米軍の攻撃も激しくなり、そのうち飛び立つ飛行機もなくなり、敗戦の日を迎えることとなった。」

猿橋さんが特攻機を見送った場所は、旧蟻通神社跡石碑の西側近くでした。そこから、「貝の池」まで一直線の道路が約一キロメートルほど南東に伸びており、それが滑走路跡です。そこを歩いて、高台になっている「貝の池」の堤防から、北西へ長さ一五〇〇メートル幅六〇メートルの滑走路跡を見下ろすことができます。

歴史の偶然か、佐野飛行場から六〇〇〇メートルの沖合に新しい空港ができて、佐野飛行場跡地の中を関西空港自動車道が高架で走り、ＪＲの空港線も通っているのです。

現在、蟻通神社はＪＲ阪和線長滝駅北西約一〇〇〇メートル（泉佐野市長滝字天王八一四番地）に移転しています。この神社は、紀貫之が歌を献じたという由緒を持ち、また清少納言の『枕草子』にも登場し、地元の人たちから「蟻通さん」として親しまれていました。

『古今和歌集』の撰者として有名な平安時代の歌人紀貫之が、紀州からの帰途、馬上のまま蟻通神社の前を過ぎようとすると、乗っていた馬が急に病に倒れ、死にそうになります。それは、ここに祀られている「ありとほしの神」の祟りであろうと通りがかりの人達が教えてくれました。手向けの御幣を用意していなかった貫之は、ただ手だけを清めて一首を献じたところ、馬はたちまち生気を取り戻しました。

「かき曇り　あやめも知らぬ　大空に
蟻通しをば　思うべしやは」

（急に曇って　何も見えない大空に星があるとはとても思えません。

それと同じように深く繁った森の奥に蟻通の神が鎮まっておられるとは気がつきませんでした。どうかお許しください）という歌です。神名の「アリトホシ」に「有りと星」を掛けています。

次に、『枕草子』二三五段「社は」のところに「蟻通」（ありとほし）の名の由来についてのお話が出てきます。

昔、唐土（もろこし）の国が日本を属国にしようと提示した三つの難題に対して主人公の中将が老いた父の助言に従い帝に進言し、難をのがれました。この三つ目の難題の答となった、蟻に糸を結んで七曲の玉に糸を通したという説話が「蟻通神社」の縁起、社名伝説となりました。

このように、紀貫之が歌を献じ、『枕草子』にも登場する由緒ある神社の移転は、長年にわたり信仰してきた地元の人々にとって、さぞかし無念だったことでしょう。

マルクスから学ぶ（1）　成瀬和之

ＮＨＫ・Ｅテレの「100 分で名著　資本論」が終わりました。いかがでしたか？これを契機に今年から「マルクスから学ぶ」という新連載を始めることにしました。よろしくお付き合いください。

「100 分で名著　資本論」の復習から始めます。

第１回『『商品』に振り回される私たち」

富と商品は違うのですね。富は「使用価値」の考え方、商品は「価値」（交換価値）の考え方です。富は、自然、知識、文化・芸術、コミュニケーション能力などがリッチな状態。新自由主義、「民営化」は、かつての産業革命前の「囲い込み」と同様公共を解体して行くのです。家事労働もケア労働も「使用価値」の大きな、大切な労働なのでした。新自由主義（市場原理主義）はケア労働を軽んじるとんでもないものだったのですね。新自由主義も40年を経て退場が求められ、新たな「コモン」共同体づくりが求められていると感じました。

第２回「なぜ過労死は亡くならないのか」

なぜ過労死がなくならないのか？「資本論」を読めばわかるのですね。恥ずかしながら、現役教師時代に「国公立大学に何人合格させるか」に「巻き込まれ」過労死すれすれまで、０時間目まで進学補習をしたことがありました。わかっているつもりでも、資本主義に「魂」まで「包摂」されかねない新自由主義です。フェイスブックで搾取される「デジタル・プロレタリアート」にも一時なりました。現代の問題ときりむすんでわかりやすいですね。資本主義に包摂されず、自然や文化に親しみ、ゆったりと、本当の意味で「豊かに」、ともに暮らしたいものです。

第３回「イノベーションが『クソどうでもいい仕事』を生む!?」

本来楽しいはずの労働が資本主義の下で苦痛となる。「労働の疎外」ですね。それは「構想と実行」が分離するから起こります。学生セツルメント運動をやっていたとき「情勢を分析し、方針を立て実践し、総括する」というのが地域実践のサイクルでした。「構想と実行」が一致していたのですね。司会の伊集院さんは「イノベーションは良いことだと疑ったことがなかった」と言います。でも、資本主義の下ではイノベーションは「クソどうでもいい仕事」を生み出すのですね。宣伝によって消費者をだまし、無駄なものを買わせるとか。そして、エッセンシャル・ワーカーが長時間低賃金労働に苦しむ。コロナ禍の現実です。こんなに「資本論」をわかりやすく解説する斎藤幸平さんは凄いです。

第４回『『コモン』の再生」は次回のお楽しみに。

さらに詳しく学びたい人は、「100 分で名著　資本論」（ＮＨＫテキスト）を買いましょう。斎藤幸平さんの「人新世の資本論」（集英社新書）必読です。もっと詳しく学びたい人は「マルクス資本論」（佐々木隆治著、角川選書）がお薦めです。

コロナ禍の中、春が来るまで３密を避け「資本輪」を武器に過しましょう。

俳句

土田　裕

寒雲の割れて現はる富士山頂
早春の鳥を集めている一樹
衣衣や思ひ遂げたる恋の猫
戦めく予備校の旗大試験
どっちみちいつかは一人離れ鴛鴦

影山　武司

一里塚の土手の日溜り花八手
青空を突き刺すごとく花アロエ
野仏の頬杖に寝て小春かな
一隅を照らし余して冬満月
冬天を飛行機雲の二等分
三つ星へ寒柝の音響き合ふ
白息を集め出走ゲートかな
高階の光はまばら冬の月
たしなむる人なき夜なり北風吹く
カーテンに小鳥の影や春隣

編集後記

ＳＫ生

▼いよいよ花粉が飛び交う季節となってきた。コロナ禍とあって不用意に街中でクシャミをするわけにもいかず花粉症の人には辛い時期である。しかし、目のかゆみと鼻のムズムズに耐える日々が続く一方でどこかに梅が咲いてはいないかと「探梅」せずとも近所ではもう梅が咲き始めている。梅一輪ずつの暖かさではあるが春は確実に近づいているのだ。一陽来復、明るい春の日差しが待ち遠しい。

▼今回から成瀬さんの「マルクスから学ぶ」が始まった。新聞の書評欄によると「資本論」関係の書籍の売れ行きは大変なものらしい。成瀬さんが文中で紹介している斎藤幸平さんの「人新世の資本論」は毎日新聞の2月6日付けの書評欄（トーハン・新書2日調べ）では2位にランクインしているそうである。この本での斎藤幸平さんの主張は明確だ。気候変動が地球にとって危機的なものになっているのはもはや疑うものはいない。この気候変動をもたらした原因である資本主義を温存したままでは、我々はこの危機から免れることはできない。「資本論」で資本主義の本質を明らかにしたマルクスはそのことを指摘していた。だとすればと斎藤幸平さんはいう。我々は資本主義を脱して生産手段やエネルギー産業等の我々の生活に不可欠なもの、それを斎藤さんは「コモン」といっているが、その「コモン」を自分らで共同管理する「脱成長コミュニズム」へと進むべきだ、と。資本主義が飽くことのない利潤拡大の追求をめざしてすべてのものを商品と化し、自然の略奪・破壊、人間の搾取とてつもない不平等を生み出してきた以上、それらの問題を解決するには、それを変えるほかはない。論旨は明快でよどみない。しかし、それをするには人びとが今まで持っていた価値観を大きく変えねばならぬ。それは可能か。「脱成長コミュニズム」にいたる道には何があり、そして、その先の未来には何があるのか。興味は尽きない。詳しい議論は成瀬さんが「マルクスから学ぶ」の中できっと語ってくれることだろう。これからの文章の展開を楽しみにしていきたい。

▼去年の暮れのこと。ゴリラ研究の第一人者である山極寿一氏が京都の高校で講演をされ興味深いことを話された。要約すると「新型コロナウイルスの襲来で我々は大きく学んだ。人間にとって本当に豊か状況というのは何なのか、ということを考え直さねばならぬ、ということだ」と。そして、この言葉に続けてこうも述べられている。「私が提案したいのは、今後の未来で必要なのは『シェア』（分かち合うこと）、そして『コモン』（公共財）だということです。国民皆保険もコモンズの一つですが、高速道路の無料化でも、空き家に無料で滞在できる仕組みでもいい。子ども食堂もそうです。そこで、大学を新たな公共財として使うべきです。大学は直接的な利益を求めない場所ですから、さまざまな問題を話し合い、解決策を講じれば、いろんなコモンズが広がるに違いない」と。山極寿一さんが語った「シェア」と「コモン」とは斎藤幸平さんのいう「脱成長コミュニズム」と触れあう部分があるのではないかと感じるがどうであろう。

▼その山極さんや斎藤さんが構想する未来を担うであろう若い人たちはこのコロナ禍で今どのように考えているのだろうか。先日、東洋大学から「現代学生百人一首」が出され、その中の何首かが新聞に紹介されていた。オンライン授業の風景を「学校のリモート授業寝落ちして起きたら画面に僕しかいない」と詠んだのは中1の男子生徒。女子生徒も負けてはいない。長い休校の後、リアル担任に初めて会い「画面越し毎日見ていた担任がデカくてびびる初登校日」と詠む。これには担任もたまらず破顔一笑したに違いあるまい。そして淡い恋心を「体育祭カメラごしに見る君の顔保存したのは秘密にするね」と詠むのは高3女子。また「プラトンもアリストテレスも教えてはくれない進路も君の心も」と詠んだ高1女子。本当に悩んでいるのは進路それとも「君の心」のどっちかな、と大哲学者のお二人も聞きたかろう。どの歌も若さがあふれかえっている。こうした歌を読んでいると春はまだまだ遠いけれど気持ちが晴れやかになるではないか。現状はうす暗くて不安だが、まだ人の世も捨てたものではない、と。

連載 **ふみの道草（３２）**　**山椒魚**

疾風に勁草を知る

それが何であるかは挙げないがコロナ禍があぶりだした世の中の理不尽を目の当たりにして、表題のことばを知った。

どこまでが天災なのか人災か

川柳でこう問う私への「近江の老農夫」を自称する大学の先輩の返答であった。

近江と言えば、近江商人の心得に「三方良し」がある。「買い手よし・売り手よし・世間よし」の三方良しである。しかし、この精神は日本の経済活動においても世界の経済活動においてもとっくの昔に死語と化している。あるのは「資本良し」だけである。

墓場まで持って行くのかその金を

資本は自ら増殖することだけをひたすら求め、止むことを知らない。

最近の我が川柳会の課題吟「お金」の特選句は、

金が金呼んで格差が無くならぬ　土竜

であった。金については、昭和二十七年に柳人・孤雨が詠んだ句がある。

金のなる木をみつけたが資金難　孤雨

先の特選句は、金の問題が個人の事情などはお構いなしにすっ飛ばして、全世界に地球的規模に人間の格差を拡大した理不尽を鋭く突いている。しかしそれでもなお、川柳らしい笑いでは孤雨の句に軍配が上がる。時代が違ってしまったのだろう。最近では次のような句にも出合わない（私などに詠めるはずはもちろんない）。

子は育つ壁はぼろぼろ落ちよるが　三窓

人の世や嗚呼にはじまる広辞苑　薫風

さて、「疾風に勁草を知る」とは、疾風が吹いて初めて強い草がわかる、という「後漢書」（王覇伝）の言葉であるらしい。そう言えば、勁草書房という出版社があったなあ。勁草とは何だと思いもしなかった。

とんと疎いのだが、ことわざや故事には面白く感心する言葉が多々ある。最近、四字熟語を駆使した、風刺精神あふれる投書を読んだ。お笑いあれ、政治の貧困に涙するであろう。

……

コロナ禍の一年　四字熟語で描写すると

中嶋由美子

コロナ災禍を、四字熟語で描写してみました。

この一年、人類界は「前代未聞」の新型コロナウイルス禍に「驚天動地」「戦々恐々」「五里霧中」「周章狼狽」状態だ。

ウイルスは、「虎視眈々」とヒトを狙い続け、「状況は「時々刻々」と「千変万化」している。「百家争鳴」「侃侃諤諤」「議論百出」「甲論乙駁」「諸説紛々」の情報の中、「一知半解」の国民としては「泰然自若」「安心立命」を保つのは「難行苦行」だ。

各国政府は「暗中模索」「試行錯誤」で対策を講じているが、中には「羊頭狗肉」ともいうべき苦肉の策もあり、「朝令暮改」も頻繁である。

「千客万来」だった店、娯楽施設、公園なども休業を余儀なくされ、「不要不急」の外出を控えよと、「門外不出」も要請された。

事態を悪化させるような「軽挙妄動」も禁忌だ。

しかしながらこの「空前絶後」の事態が「一朝一夕」に解決するとは考えられず、報道に「一喜一憂」する日々はこれからも続く。

「廃寝忘食」で治療に当たる医療人には、深謝あるのみだ。

「内憂外患」「陰々滅滅」「右往左往」状態の人類は、「一件落着」で「起死回生」「安寧秩序」の世となり、「歓天喜地」「喜色満面」で「拍手喝采」「欣喜雀躍」できる日を「一日千秋」の思いで待っている。

が、過去長きにわたって自然界を「遮二無二」破壊、汚染し続け、「弱肉強食」の所業を顧みなかった人類界を顧みる時、これは「因果応報」「自業自得」の現象にも思われる。

今、人類は人類史を真摯に反省し、あるべき未来を「自問自答」することが求められている。

（週刊金曜日、二〇二一年一月十五日号「言葉の広場」）

……

さてさて、言葉を殺す政治をどうする。

自問自答　すべき人ほどしないこと

慇懃無礼　あしらいましょう寄り添って

馬耳東風　民意など聞く耳はない

傍若無人　見ると言ったら見るサクラ

厚顔無恥　しっかりていねい心がけ

医療崩壊　山笑う国で泣く民

突然変異　期待できないスガ政治

余剰人員　一強議員多すぎる

半知半解　コロナ移動で広がらぬ

一心不乱　ただひたすらに生きること